



114
A2897



日本政府ニ東京西京大坂
馬車線路建築ノ企謀ヲ建言

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

ス
當今東京ニ於テハ專ラ人力車又ハ
千里軒號ノ馬車ヲ以テ運輸ノ用ニ
供ス其ノ害アルハ世人皆知ル処ナ
リ就中大都會運輸方法ノ便不便ヲ
論スル者ハ之ヲ患エサルヲ得ス往
日政米各國ニ於テ此論說頗ル盛ナ
リ之カ漸々各國行政官ニ浸スル一

大事件トナリ論究至ラサレ処ナク
終ニ運輸ノ多少ヲ不論都會ノ地ハ
勿論繁昌ノ市街ニハ總テ馬車線路
ヲ建築スルニ決議セリ故ニ今日ニ
至リ欧米ノ都會繁榮ノ地ニ該路設
置ヲラカレハナレ蓋此方法ニ依テ
裨益ヲ得ルナク少ナカラレハナリ
抑モ其ノ車土ニ居ル震動ヲ不覺風
雨砂塵ノ患エナク居ル賃錢モ又々廉ナ
リ從來英國倫敦府伊國巴利府其他

各國ノ都府ニテ著名ナルナムニブ
ウス馬車トモ里所シモ直ニ之カ為ニ
壓倒セラレ近年ニ及テハ更ニ用ユ
ル處ナキニ至ル依此之ヲ見レハ他
ノ運輸方法ニ卓越スル推シテ知ル
可シ予今日本政府ニ世界万国ノ
例ヲ以テ貴國日進成効ヲ万国行
政ノ止ニ期スレノ際ニ當リ人民康
安ヲ保護スル一大事件ヲ言上セシ
トス幸ニ重覽採用アラシテヲ冀望

今爰ニ貴國運輸方法、不便利ヲ陳
 述シ之ヲ燒止スルノ方法ヲ稅キ而
 右馬車線路ノ便益ヲ記載セシトス
 予カ探訪ニ依リハ東京府下人力車
 數總テ貳萬四千四百七拾輛アリト
 内貳人乘
 壹萬四千六百八拾貳輛ト見做
 シ但シ一輛ニ附キ一ヶ年ノ稅
 此稅金合シテ二萬九千三百六

拾四圓
 壹人乘
 九千七百八拾八
 但シ一圓
 此稅金合シテ九千七百八拾八
 圓
 年々政府ニ上納ノ稅金三萬九千
 百五拾二圓ガリ
 右車數ニ應スルノ人負テ三萬人ト
 租シ二人引アリト見做スルハ府下人

民中最モ強壯ノ男子過半ヲ以テ之
ニ充ツ諸良医ノ説ニ連綿引續キ車
夫ノ業ヲ為ス者ハ三年ヲ期シ身體
疲勞進退屈伸ノ自由ヲ失フニ至ラ
ント宜ヘナリ其ノ職業ノ苛酷ナル
千辛万苦ノ終カノ日月ニ後日ノ治
計ヲ營ムト能ハサルニ至ルト而メ
前日ノ千辛万苦ニ依テ後今些少ノ
貯財スルモ有リト虽モ大シテ以
テ後日ノ餘光ヲ支スルト甚々難カ

ルベシ之ヲ以テ推考スルハ年々
當府下ノ人民三万人ヲ失フニ
至ラシ今又西京大坂ノ西府ニ三万
車夫アリトシ計算スルハ十ヶ
年ニ六拾万ノ人民ヲ失フニ至ル然
ラハ歐洲第一等ノ常備兵數ヨリ許
多ナラシ此ノ駭キ怖ル可キ無教ノ
人負テ殆ト瘡物トナシ庶人ノ便利
ヲ計ラシトスルモ到底ソノ成効ヲ
養スルト難カル可シ

人力車ヲ以テ運輸ノ用ニ供ハル何
レノ國ニ於テカ之ヲ嫌厭セザルヲ
得ニヤ抑モ人力車ノ通行スル道路
ノ直線ヲ行カズ雜沓無涯往來ノ人
ヲノ縮身戰慄セシム該車ノ道路ニ
防碍ヲナス容易ナラス又車夫ノ容
貌ヲ見ルニ膏汗四支ニ溢シ身體ヲ
屈曲シ其ノ刻苦實ニ見ルニ忍ビサ
ルカ如シ現時 貴國文明日ニ進ミ
月ニ開クニ際ニ當リ如此苛酷不

便ノ運輸方法ヲ用ニル真ニ不適當
ト云ハサル可カラス
數年來府下諸街道、營繕ニ費耗
スル処幾何クヲ不知然レ其ノ効
ヲ奏スルヲ見ス此等ノ原因ハ皆
人力車ニ歸セリル、不得於是今
原因ノ依テ起ル所以ヲ説カシ
然テ道路ニハ常ニ土地ノ凹所アリ
自カウ一個ノ小窪ヲ作為ス而メ其
小窪ニハ毎ニ雨水ノ滯滞スルカ故

土地漸々之ヲ為ノ破潰スルニ至ル
然ルニ一輛ノ人力車ヲメ之ヲ過リ
シムルハ該車輪ノ土地ヲ切割ス
ル恰モ農夫ノ鋤ヲ以テ田畠ヲ耘鋤
スルカ如シ而今又數百輛ノ車ヲ給
繹過リシムルハ數日ニシテ一個
ノ小窟ハ忽チ真ノ泥穴トナリ人車
供ニ通行ニ能ハサルニ至ル
人力車、乗客ニ便ナラザル風雨砂塵
ヲ務カ入雪中ニハ殆ト用ヒ難ク兩

中雨後ホニハ乗客ヲシテ泥濘ノ患
ヲ免カレシメス又該車ニ乘シ遠行
スル甚々難シ偶々遠行スルモ身軀
疲勞不快ナルヲ漕リテ而テ該車
ノ通路ヲ防リル從横雜沓行人ノ煩
劇ヲテス少ナカラス又千里斬馬
車ノ危険ナル最モ甚々レト云可シ
ソノ製造堅牢ナラズ重大ニテ導キ
方大ニ思シ、ソノ道路ヲ通行ス
ルヤ路上ニ充塞レ往來ノ防碍ヲテ

スノミナラズ行人ヲシテ屢ハ危難
ノ場ニ陥入ラシメントス其他該車
及ヒ人力車ノ不便ナル牧羊ニ違ア
ラズ今此等ノ運輸法方ヲ矯正セシ
ニハ馬車線路ヲ設置スルニ如クハ
ナレ當今米國サンフランシスコヨ
リカリホルニ一ノ間ノ線路ニ用ユル
諸車中ニ足立馬車ノ寫真ヲ添ヘ以
テ賞覽ニ供セシトス該車ノ寸法賃
錢ホハ詳細久尾ニ記載セシ

該車ノ便益アル實物ヲ見サレハ豫
メソノ便宜ナルヲ辨レ難シ之ヲ通
行セシムルニ二線ノ鐵路ヲ五尺ノ
距離ニ置ク又三尺ノ距離ニ置クモ
アリ或ハ一線ヲ以テ通行セシムル
ノ方法アリ車ニ電氣ニ足立蒸氣
或ハ空氣ノ壓迫力等ヲ用ユルモア
リ
該車通常ノ速力一時間ニ凡ソ一里
三拾町ヨリ三四里ニ至ル然レモ通

路、雜沓ヲナスヲシ
緑路ヲ実築スルニハ豫メ賊木ヲ地
下從横ニ掘埋シ甲ヲ横ニ置キ乙ヲ
從ニ置キ其乙木ノ上ニ鉄線ヲ釘附
シ該線ヲ道路ノ地面ト平準ニス而
テ諸車常ニ此ノ線路ヲ通行スルカ
故ニ往來ノ防碍ヲナスヲ偶マ
危難ノ場ニ望ム片ハ一種無類ノ停
車機ヲ以テ直ニ車ノ回轉ヲ止ム然
ラハ通路ノ妨碍ヲ為サ、ル再ナラ

ラズ道路ノ破潰スルヲモ又無カル
可シ
乗客ノ該車上ニ安居スル震動ヲ感
セス回轉スルヤ否ヤヲ覺エサルガ
如シ往日歐洲各國ニ用イシ「リ」ニ
ブラウスホノ比類ニ北ス四方ヲリ大
氣ヲ流通セシメ兩要寒風ノ節ホハ
堅固ノ障子ヲ閉チ家根下ニ空氣窓
ヲ設ケ故ニ乗客ヲシテ更ニ患フル
ルナカラシム車ノ前後ニ別室ヲ設

吹煙ヲ欲スルカ或ハ荷物持ッ客
 等ニ供ス馭者客ノ上下ヲ報スルニ
 鳴物ヲ以テス今此便ナルヲ説キ終
 一里拾八町 貨錢五錢
 此時間四拾分ヨリ四拾五分迄
 一記ス

前條馬車ニ種々ノ類アリト化セリ
 依テ今爰ニ諸車ノ寸法及ニ組立方
 等ヲ化セシ
 二尺立馬車組立方

二足立馬車、為ハ道幅五尺ヲ
要スソ、西端ニ鉄線ヲ布キ該車ヲ
通行セシム

鉄線、目方一尺ニ附キ
英ノ十二リ、ウル

車、外部長サ一丈六尺四寸余

横幅、七尺六寸、日高サ九尺

内部長サ一丈六尺余

横幅、七尺

総目方英ノ二千七百リ、ウル

後、エノガラツラ、ルハ桶後、リ、別、差

取者、二人、但、此、一人、ハ、後、ハ、上、下、リ、注

前後、ニ、ウ、ウ、フ、ラ、ル、ハ、ウ、設、ク

此、ノ、車、上、ニ、人、数、四、拾、二、人、ヲ、乗、石

路幅、三尺、ヲ、要、シ、兩、端、ニ、鉄、線、ヲ、布、ク

鉄線、目方、一尺、ニ、附、キ

三尺、或、尺、守、誤

該車外部長サ一丈二尺
 横幅六尺九寸余 高サ八尺
 内部長サ一丈一尺八寸
 横幅六尺四寸
 後ヨリ車轆マテ二丈六尺 通
 一ヨリ車轆マテ二丈六尺 通
 取者一人 函取者リ 兼務者此 函中一
 教價ス
 英ノ六リ一ウ
 一丈二尺
 八尺
 一丈一尺八寸
 六尺四寸
 二丈六尺 通

車上一拾六人ヲ乗ス 舟ハ人ヲ
 右ニ車ノ製造ニ圓形又ハ無家根
 アリ其他種々ノ形アリト 虫生
 略ス 馬車製造方ニ從テ價ノ高
 低アリ代二千弗ヨリ千五百弗ニ至
 一丈之馬車代價千二百弗ヨリ八
 百弗ニ至ル此等ノ馬車ハ何レモ堅
 牢ニシテ年々塗漆スルハ六ヶ年

洞他、修繕ヲ要セス

蒸気仕掛ケ、方法

蒸気機関、方法ハ大概東京横濱間

ノ鉄道ト異ナリ、唯機関ノ勢

力ヲ僅ニ減セシムル、之米國シカ

コ、ニエヲルレ、之ヲ設ケシカ

此蒸気ノ能力ニ依リ鳴声ヲ發シ、

市街ノ中馬ヲ驚愕セシメ、屢害アル

トアレハ近來之ヲ廢止セリ

空氣壓迫力仕掛ケ、方法

此、方法ハ蒸気ノ勢力、以テ空氣ノ

壓迫力ニ換工用スルモ、ハナリ當今

巴里府ニ於テ此機関ヲ用スルト、虽

此只管經驗、之ニシテ未タ賢効ヲ

著ハサス依テ今爰ニ方法ノ詳細ヲ

記セズ

一、鉄線路ニテ車ヲ通行セシム

ル、方法

一、線路ヲ用スルノ方法ハ、取モ直リ

ス、市中ニ用スル迅速仕掛ケノ道、鉄

ナリ此方法ハ別紙ヲ以テ詳細ニ記
セシト欲ス該線路ヲ設クルニ莫
大ノ金額ヲ要セス迅速ノ運輸方
シハ當今貴國人民ノ欲スル所ナリ
故上ニ車ヲ引上ルノ方法
故道ハ車ノ為ニ第一ノ難所ニシテ
更ニ便宜方法ニナキ近來末國
ニ於テ便宜ノ方法ヲ發明セリ同國
ワサウヲラシスニ府中クレテ所
リニニウヲルト引ヤルノ間ニ一夫

險阻ノ故アリ一所毎ニ六拾三天四
尺ノ高サヲ以ツ此故上ニ車ヲ引上
クニニ道路ノ中央ヲ掘リ厚サ一
位ノ鋼鉄鎖ヲ設ケ故ノ絶頂ニ三拾
五馬力ノ蒸氣機関ヲ置キ右鋼鉄鎖
ヲ操上ケシム車ニハ前部ニ一小力
車ヲ設ケ之ニ鉄機ヲ附ケ以テ鉄鎖
ヲハサマシム又車ヲ止ムニハ一
種ノ停車機ヲ以テス車道ハ三尺幅
ニシテ西端ニ鉄線ヲ布キ中央ニ右ノ

鉄鎖アリ以上三拾五馬力、一機関
ニテ常ニ十八車ヲ上下セシム
右ハ府下九段坂上野及ヒ城ノ近傍
ニ用ユル通耳ノ機ナリ諸荷物ノ運
輸ニ妙ニシテ車力如キノ及フ処ニ
非ス
馬車線路建築ニ附キ貴國ノ經濟
上ニ関スル裨益ヲ説カサル可カラ
ス。雖然豫メ該路設置ノ後年々得ル
処ノ利益ヲ記シ然ル後ニセシトス

今夏ニ馬車線一路ヲ府下芝淺草ノ
間砦間一哩軒場細置六ノ間一路ヲ芝
上野ノ間毗瀾ノ一里砦四ノ所立軒場ノ間
ノ建築セシト假定シ計算スルハ
ハ往返ノ四線路合シテ五里三拾五
町拾二間然レモ芝ヨリ本所迄ハ
往返ノ二線路ニテ足レリト夫ヨ
リ右ニ線路ヲ部分シ四線路トナシ
二路ヲ淺草橋ニ通レ他ノ二路ヲ
違月鏡橋ニ通ス芝本石所ノ間ニ拾

九町トシ往返ノ二路ヲ合シ一里二
 拾三町四十八間總里數五里三拾五
 町三拾六間ノ存ヨリ差引スルハ
 残りノ里數四里十一町二拾四間ナ
 リ
 五尺幅ノ線路ニ二尺立馬車ヲ用ニ
 ルトシ計算スルハ線路一間ノ建
 築入費二拾四弗ナリ
 右四線路建築入費概算左ノ通り
 四里拾一町二拾四間ノ線路建築

入費合シテ二拾二万三千七百七
 拾六弗
 二尺立大馬車四拾五輛
 代價九万弗
 附ニ附

千二
 日本馬三百六拾足
 代價二万八千八百

弗附
 八拾尺
 此建築入費三万五千
 弗
 七
 此建築入費三万五千
 弗
 七
 此建築入費三万五千

馬具 白八拾 代價五千四百吊
 附 三十一捕 吊二
 社長住家 一 此、建築入費四
 千六百吊
 右家敷地 一万坪 代價二万吊
 諸道具買入 五千元
 合 之、四拾一万二千五百七拾六吊
 年々、諸入費概算左、通り
 馬 三百六十拾天飼料 一ヶ月分
 二千百六拾吊

六一 吊足 附
 馬 鉄 背 一ヶ月分 三百六十吊 組
 一 足 完 付
 要 燈 兼 薬 品 入 費 一ヶ月分 六百吊
 厩 取 締 方 七人 月給 百七十五吊
 附 二シ 十一人 吊二
 取 者 九拾人 月給 九百吊 但シ一
 吊十
 嚮 導 方 九拾人 月給 九百吊 但一人
 十 吊作

僕 八格人 日給 四百八拾弗 租人
 六 附 四 人 日給 六拾弗 租人
 帳 番 四 人 日給 六拾弗 租人
 月費合 五千六百三拾五弗

年費 = 直 六万七千六百二十弗

社長 一人 年給 七千二百弗

監督 一人 日給 三千六百弗

馬醫 一人 日給 三千弗

記簿方 一人 年給 二千四百弗

合 撥潤方 一人 日給 二千四百弗

馬車線路設置入費總 四千四百一十

二千五百七拾六弗 預 十 弗 附 刊

此利金合 四千一百二十五

拾七弗六拾錢

馬 三百六十尺 代價 二万八千八百弗

內 一 年 損耗 百弗 附 拾 五

弗 十 二 合 四千三百二十拾弗

馬具百八拾ノ代價五千四百弗
 内一ヶ年ノ損耗百弗ニ付二拾
 五弗トシ
 合シテ千三百五十拾弗
 馬車四拾五輛ノ代價九万弗
 内一ヶ年ノ損耗百弗ニ付二拾
 五弗トシ
 合シテ二万二千五百弗
 此ノ高合シテ六万九千四百二拾七
 弗六拾錢

外ニ
 豫備金 一万五千弗
 一ヶ年ノ諸入費總テ拾七万零六百
 四拾七弗六拾錢
 五尺幅馬車線路設置ノ後一ヶ
 年ニ得ル処ノ利益概算左ノ通
 二尺之馬車四拾五輛ヲ以テ日々朝
 第六時ヨリ午後十二時迄往復十度
 ヲト假定シ右車往復一度ニ平均
 七拾五人ノ乗客アリ一人前運賃五

錢トシ一年三百六拾五日ニ此ノ
高六拾一万五千九百三拾七吊五拾
錢

内

年費拾七万零六百四拾七吊六拾
錢ヲ差引ニ残り全クノ利益

四拾四万五千二百八拾九吊九
拾弍

今又上野淺州ノ往復四線路ヲ二尺
六十幅ニ一足立馬車ヲ用スルニ

計算スルハ線路建築入費一間ニ
附キ六吊

右四線路設置諸入費概算左ノ

四里拾一町二拾四間ノ線路建築
入費

合シテ五万五千九百四拾四吊
一足立馬車百輛 代價拾万吊

和輛一輛 附
日本馬三百六拾尺 代價二万八

千八百弗但八尺二
 厩 七ツ 此建築入費三万五千
 弗但車置
 馬具 二百 代價六千弗但二付一
 諸道具買入々費 五千弗
 社長住家一 此建築入費五千弗
 右家敷地 一万坪 代價二万弗
 諸入費合シテ 二拾五万五千七百四
 拾四弗

年々、諸入費概算左、通
 馬 三百六十尺、飼料 二千百六十弗但
六帆二付
 馬鉄香 一ヶ月分 三百六十弗但尺
一付宛
 熨燈并藥品入費 一ヶ月分 六百弗
 厩取締方 七人 月給 百七拾五弗
租二拾五人付
 馭者 二百人 月給 二千弗但二付一

帳番	四人	日給	六拾	但一人
軒	五	給	但一人	
僕	八拾人	給	四百八拾	但一人
五附	付			
月費	合之	五千八百三拾五	弗	
年費	直之	七万二千	拾	弗
社長	一人	給	七千二百	弗
監督	一人	上	三千六百	弗
馬醫	一人	上	三千	弗
祀簿方	一人	給	二千四百	弗
撥関方	一人	上	二千四百	弗

四線路設置入費總計二拾五万五
 千七百四拾四弗 預備金
 此利金合之計二万五千五百七
 拾四弗 四拾錢
 馬三百六拾足 代價二万八千八
 百弗
 内一々年、換耗百弗ニ附十五
 弗トシ
 合之計四千三百二十拾弗

馬車百輛、代價拾萬弗
内一ヶ年、損耗百弗、附二拾

馬具二百揃、代價六千弗

内一ヶ年、損耗百弗、附二拾

五弗トシテ
合シテ千五百弗

豫備金一万五千弗
年々入費金總テ拾六万拾四弗也

拾錢

年々得ル処、利益概算左、通

百輛ノ馬車ヲ以テ一日ニ往復十度

平均四拾人アリ一人前運賃五錢ト

之一日ニ得ル処ノ金高二千弗一ヶ

年七拾三万圓也
内年費拾六万拾四圓ヲ差引クニ残り
全クノ利益

五拾六万九千九百八拾五六十弗也

前條ニ記載セシ如ク上野淺州ノ往復四線路ヲ五尺幅ノ大路ニスルハ二尺立ノ大馬車四拾五輛ヲ供シ内五輛ヲ豫備トシ他車破換ノ節ハ之ヲ以テ欠ヲ補ヒ又祭日ホ往來ノ人多キハ右五輛ヲ増加シ用ユ可シ平常ハ一路毎ニ二拾輛ヲ置キ往車拾輛復車拾輛トシ各五町ノ距離ヲ隔リ往復一度ノ時間一時三

拾分ト定ムルハ各車五分間ノ距離ヲ隔リルニ當タル又右四線路ヲ二尺六寸幅ノ小路ニスルハ一尺ノ小馬車百輛ヲ供シ内九輛ヲ豫備トス平常ハ一路毎ニ四拾輛トシ往車二拾輛復車二拾輛各二町三拾間ノ距離ニ置ク往復六町ノ間ハ各時三離五分隔リテ時ニ當ル各車一度ノ往復ニ一時三拾分ヲ費ストスルハ朝第一六時ヨリ午後十二時迄十回ヲナス

難カラズ未ニ國ノモシ
カニ下リテハ、府ニ下リテハ、淺ル草ノ間、難カニ路ニヨリテ
車四拾五輛ニ馬三百六拾足ヲ割賦
スルハ一日車毎ニ馬八足ヲ供ス
四時間毎ニ馬ヲ交代セシメ各馬往
復三回ヲナス此里數六里余ヲ、
割合ナリ米國ニ於テハ東京ノ如キ
平地ニ用ユル馬一日ニ九里ヨリ十
二里位ノ割合ヲ以テス其ノ異ナル

所以ハ馬ノ強弱ヲ以テ論スレハナ
リ、六寸幅ノ小路ニシテ一足立ノ馬
車ヲ用ユルモ、右ノ割合殆ト同様ナ
リ、二足立馬車往復ニ七拾五人一足立
、小馬車ニテ四拾人、乗客ヲ得ル
ハ容易ナリ之ヲ證セシニ當テハ淺
、仲ノ間一時間少ナク、氏人力車六百
、過リルヲ見ル

由是考レハ右ノ乗客ヲ得ルハ決シ
テ難カラス浅州上野ノ二線路ヲ設
クルト虫モ市中人民ニ不十分ナル
ハ言テ待タリ所ナリ故ニ今又品
川ヨリ三田ヲ通シ暖宕下カ或ハ新
橋ニ至ル新宿ヨリ市ヶ谷本郷ヲ
通シ日小橋ニ至ル芝ヨリ城内ヲ
通シ目鏡橋ニ至ル四ツ谷ヨリ直
線大橋ニ至ルノ四線路ヲ設置セン
ト計算スルキハ上野浅州ノ二線路

設置入費ニ一倍シ八拾二万五千百
五拾二帛
六線路設置諸入費合シテ百二拾三
万七千七百二拾八帛
此ノ利益一ヶ年ニ百三拾三万五
千八百六拾九帛七拾錢
京都大坂ニ二線路ヲ、ヲ設置スル
キハ
京都ニ線路ノ入費四十一万二
千五百七拾六帛

大坂 同上
 右四線路入費合シテ八拾二万五
 千百五拾二弗
 此、利益一ヶ年ニ八拾九万零
 五百七拾九弗八拾錢
 三都十線路設置入費總テ二百零
 六万二千八百八拾弗
 此、利益一ヶ年ニ二百二拾二
 万六千四百四拾九弗五拾錢
 右拾線路ヲ二尺六寸幅ノ小路ニ一

足立 小馬車ヲ用ユルトシ計算スル
 時ハ

東京六線路設置諸入費合シテ七
 拾六万七千二百三拾二弗
 此、利益一ヶ年ニ百七拾万九
 千九百五拾六弗八拾錢
 京都二線路、諸入費二拾五万五
 千七百四拾四弗
 此、利益一ヶ年ニ五拾六万九
 千九百八拾五弗六拾錢

大坂二線路、入費 同上

同上

線路設置入費合シテ百二十拾七万
八千七百二十拾弗

此ノ利益合シテ二百八拾四万
九千九百二十拾八弗

小路ニ一足立馬車ヲ用スルハ大
路ニ二足立大馬車ヲ用スルカ如ク

巨万ノ入費ヲ要セズシテ却テ許多
ノ利益ヲ顯ハス 雖然ソノ建築大路

ニ於ケルカ如ク堅固ナラサルカ故
ニ永久ノ用ヲナスヲ難シ

右線路設置入費巨數ニ見ユルト
モソノ施行ノ難カラサル之ヲ證セ

セシニ當今三都ニ人力車夫六万人
アリトシ一人ニ附キ一月平均三拾

四錢ヲ設ケ得ルハ六万人ニテ一
ケ月ニ六拾万圓一ケ年ニ此高七百

二拾万圓トナル

此數許多ナリトモ之ヲ以テ國益

ト云可カラス如何トナレハ人力車
ノ運輸ニ便ナラサルト經濟上ニ大
害アルトテ以テナリ是レ豈三都人
民蠱毒ト云ハサルヲ得シヤ且車夫
業タル農夫ノ田畝ヲ畊ヘシソノ
業ヲ永久ニ及ホレ快樂又其中ニ有
ルカ如キノ比ニアラス終カノ日月
ニ刻若ノ骨折ヲ以テ健固ヲ害シ精
神ヲ悩マシ而テ其貯財スルモノヲ
見込加之終ニハ一ヶ年ニ六万人ノ

廢物ヲ作為スルニ至ル豈患エサル
ヲ得シヤ抑モ車夫六万ノ設ケ得ル
莫大ノ金額ハ人民一般ニ割賦スル
一種ノ税金ト云モ可ナリ然リ而メ
其運輸ノ便ナラサル遲延ニシテ賃
錢ノ定限ナク且之ヲ不人業ト云フ
ベシ今ヤ貴國日進ノ際ニ當リ便
宜ノ方法ヲ需メ之ヲ改正セサル可
カラス予於是馬車線路ノ便益ヲ説
キ以テ此方法ノ採用アラシムヲ希

望ス其設置タルヤ莫大ノ金額ヲ費
サスレテ裨益アルト夥シト云可シ
馬車線路設置ニ附キ利益アル所以
ハ前條説ク処ヲ以テ証スルニ足シ
リトス爰ニ亦タ他ノ便益ヲ記シ當
今不便ノ方法自然癯滅スルノ所因
ヲ説カン

馬車線路ニ依テ生スル裨益

第一條

馬車線路設置ノ以上ハ人力車ノ如

キハ該車ニ抵抗スルヲ能ハスニテ
自然散滅セサルヲ不得然ルハ車
夫ハ生禾ノ農夫ニ復シ田野ニ退去
現時恭平ノ時一層耕作ヲ盛ニセハ
大ニ國益ヲ加増スルニ至ラン

第二條

道路車ニ破潰セラルノ患ヲ免レ
更ニ倚覆ヲ要セサル可シ

第三條

定價ハ廉ニメ人五錢ヲ拂フハ市

中ノ何處ニ行リモ擅マ、ナリ
海東ニ通ル海設仮令ハ十人ノ客アリ
芝ヨリ新宿ニ行カント欲スルハ
芝上野間ノ馬車ニ乗レ目鏡橋ニ至
リ芝ニテ請取レ五銭ノ通券ヲ以テ
更ニ新宿通レ、馬車ニ乗ル然レハ
ハ僅カ五銭ヲ投シ殆ト三里ノ通ヲ
行キ十銭ヲ以テ六里ノ道ヲ愉快ニ
往復スルヲ得可ク如此ノ方法ヲ
設クルハ市中何處ニ行リモ自由

自在ナリ

第四條 人民ノ經濟及便宜ナル

前文ニ証セシ如ク三都ノ人民人力
車ニ乗スル年毎ニ金額七百廿万圓
ヲ費スト雖モ馬車道設置ノ後ハ此
巨額三分ノ二ヲ減省シ而其迅速ナ
ル早ナラヌ夏ハ冬陽風塵ノ患ヲ免
レ冬ハ雨雪嚴寒ノ害ヲ避クルヲ得
ヘシ

第五條

該路ノ便ナル市中ノ遠近ヲシテ
同一定價ノ如キモ距離
離ノ長短ヲ以テ其ノ定價ヲ高低ス
ルヲ以テ故ニ便宜廉價ノ兩益アル
ヲ以テ府下人民貧富ノ別ナク好
ニ應シ遠近ヲ論セズ自由ニ住居
定ムルヲ得可シ

第六條

初年ノ利益ヲ以テ線路建築及ヒ其

他ノ諸入費ヲ拂ヒ若干ノ餘金ヲ得
第二年ノ利益ヲ以テ府下一般ノ道
路ヲ脩繕ス第三年ノ利益ヲ以テ馬
車道未設ノ諸街ニ普ク該道建築ス
ルヲ得ベシ一ケ年ノ利益二百二十拾
二万六千四百四拾九弗五拾錢百
廿拂ノ剛好此元金二千二百弗ニ
當ルニ尺六寸幅ノ線路ニスルハ
一ケ年ノ利益二百八拾四千九
百二十拾八弗此元金二千八百四拾万

弗ニ當ル
其他種々ノ裨益アリト
雖モ賢明諸
公、明知セラル、所
タルヲ以テ茲
ニ之ヲ畧ス願クハ
此ノ事件ニ附
何
如様ノ儀タリ
臣垂問
ア
ラ
ン
ト
シ
テ
希
望ス
謹言

ラ
リ
ユ
ー

